（別紙 2）

審査の結果の要旨

氏名　　松原　薫

本論文は、ヨハン・ゼバスチアン・バッハ（1685-1750）の音楽とその受容について、対位法理論との関わりという観点から考察した論文である。対位法はつねにバッハの音楽を特徴づける要素とされてきたが、本論文は、対位法理論や対位法観自体が歴史的に変化してきたことに着目することで、それを軸として、18 世紀におけるバッハ受容の状況を、音楽観全体の大きな変化のなかに位置づけ直そうとするものである。

本論文は全 7 章からなる。第 1 章で 18 世紀の音楽辞典における「対位法」の記述の変遷を概観したのち、第 2〜3 章では、バッハの同時代者である 18 世紀前半のハイニヒェン（1683-1729）とマッテゾン（1681-1764）の論考が取り上げられ、古代以来の数学的音楽観における理性と感性の対立の中で「理性」の側のものとされてきた対位法に「感性」の側のものとしての位置が与えられるようになり、対位法をめぐる議論の枠組み自体が変化しはじめた状況が明らかにされる。

後半の第４〜７章においてはバッハ死後、18 世紀後半のマールプルク（1718-1795）、キルンベルガー（1721-1783）、ライヒャルト（1752-1814）、ネーゲリ（1773-1836）の著作が取り上げられる。これらの論者においても対位法はバッハの音楽に普遍的な価値を与える重要な要素としてつねに言及されるが、世紀前半にはいまだ数学的音楽観の余韻の中で共通の原理として機能していた対位法が、後半には、ひとつの様式、あるいは技法という操作可能なものとして捉えられるようになっている状況が示される。このように対位法観自体の変化という軸を設定することによって、バッハがその死後に「対位法の巨匠」として「正典」化されてゆく動きが、音楽の枠組み全体の大きな変動と密接にからみあう形で起こってきたさまが描き出される。

本論文の最大の特長は、徹底的な言説研究の手法を用いることで、この時代に対位法観自体に生じた大きな変化を浮き彫りにした点にある。バッハの対位法についての研究は決して少なくないが、多くが今日の対位法観を無自覚的にバッハの音楽に適用しているために、一面的になる憾みがあったのに対し、ここでは狭義の対位法理論だけでなく、バッハと対位法の関係を論じた多様な論者の記述を俎上に上げることで、バッハの音楽に対する理解の枠組み自体が、対位法観の全体的な変化の中で変わってゆく状況が見事に描きだされている。

作曲家の受容史研究は近年盛んであるが、ともすると受容の局面を作曲家の同時代状況と切り離し、対比させる議論になりがちである。本論文は対位法をめぐる言説の多様な変化をきめ細かく追うことで、作曲家や作品自体の問題とその受容史とをひとつの視野のうちにおさめることに成功しており、バッハに限らず、作曲家研究にとってのひとつのモデルとなりえよう。

バッハの個々の作品に立ち入った具体的な議論が不足しているといった、言説研究特有の問題点もあるが、得られた成果に照らせば大きな瑕疵とは言い難い。以上をふまえ、本審査委員会は本論文を、博士（文学）の学位を授与するにふさわしい論文であると認定するものである。